

## 隠蔽された「母」

—堀辰雄「麦藁帽子」論—

西 本 は る 華

はじめに

堀辰雄「麦藁帽子」は、「日本国民」一九三二年九月号に掲載された短編小説である。これまで「麦藁帽子」は大きく二つの点に着目して論じられてきた。第一に、作家の実体験に基づく私小説とする視点である。同作が私小説として見なされてきた背景には、堀の大正十年の夏の体験がある。堀は、日頃から交流のあった内海家が避暑のため千葉県竹岡村に滞在した際に呼び寄せられている（1）。この内海家の三女、妙が「お前」のモデルとされているため、「私」＝堀、「お前」＝妙とい

う構図に当てはめた私小説、なかでも「初恋小説」として受け止められてきた（2）。「麦藁帽子」の私小説性に関しては、例えば野口存彌が同作を「作者にとつて自伝的性格の作品」であるとした上で、「お前」のモデルの少女が「麦藁帽子」発表直後に死去していることを考慮すると、「作品に対象化した人が重い病氣にかかっていることさえ触れられていない「麦藁帽子」には、結果として清らかに澄んだ鎮魂歌という性格が与えられ」ていると指摘している（3）。

第二の視点としては、堀の表現手法をめぐる側面が挙げられる。この点については、堀自身の次

のような言説が踏まえられている。

私は一人の娘を語り手に映つてゐる側からのみ描いていった。娘の心理の動きがどうしても語り手に解らないままに、小説が進展し、その結末に及んでもその心理の上に何等の照明を与へずに、小説を閉ぢる。読後、読者をもその語り手と共に、一種の謎めいた気持の中にとり残させる。―それは一篇の小さな心理小説でありながら、普通の心理小説家がそれをするやうには、娘の心理の裏側に読者を引つ張つて行かない。常に光線は「私」の側からのみ投ぜられてゐる。

―さういふ気まぐれな思ひつきで、私はその娘の幻像を出来るだけ生き生きさせようとしたのだ。(4)

堀による「麦藁帽子」の表現手法に関する言及は、多くの論考で引用されている。例えば池内輝雄は、右の言説について「この方法は、後につづく「美しい村」「物語の女」「風立ちぬ」「かげろうふの日記」などのほとんど堀辰雄の代表作といえる作品群の成立を可能にした」と述べる(5)。また、大森郁之助も、堀が「麦藁帽子」の素材の作

品化に関しては「徹底した(方法)的作家」であったとしている(6)。

このように「麦藁帽子」は堀の体験が反映された私小説として受け取られ、しばしば堀の他作品との関連の中で、特にその表現手法についての検討がなされてきた。しかしそれが、結果的に同作の読みを固定してきたとは言えないだろうか。

本稿では、あえて「堀辰雄」という作家コードを特権化することなく、「麦藁帽子」を「私」が語るテキストとして捉えたい。テキストにおいて「私」は、基本的には「お前」に向かつて呼びかけている。しかし「私」は一度だけ、「お前」以外の人物に「あなた」と呼びかける。それは「母」である。「あなた」という例外的な呼びかけに着目することで、「初恋小説」では回収しきれない、新たな読みの局面が見えて来ないだろうか。

この点を意識しつつ、まずは「私」がテキストを語る際の特徴と、その特徴から浮上してくる事柄を整理する。その上で、「あなた」の出現の意味、さらには、「私」が語ろうとして語りえなかった物語の内実を明らかにしたい。なお、本論を進めるにあたって、一章の前にある導入部分を「プロローグ」とする。また、テキスト内の章分けについ

では、プロローグⅡ（プ）、一章Ⅱ（一）、二章Ⅱ（二）、三章Ⅱ（三）、エピローグⅡ（エ）と表記する。

## 一、「私」の語り

杉浦晋が述べているように、「麦藁帽子」は「一人称の「私」を作中人物Ⅱ話者とし、現在時制と過去時制とを使い分けつつ、「私」への内的固定焦点化を基本として語られる」テキストである（7）。しかし杉浦の指摘は、堀のいくつかの作品を通して「外部」と「内部」の語りの「交通」を明らかにすることが目的であるため、「麦藁帽子」の語りの位相を把握するにとどまる。本節ではこの指摘を受けつつ、あらためて「私」の語りの特徴について再検討することから始めていきたい。

「麦藁帽子」は「私」によって、ある特定の時期の記憶についてのみ語られている。（一）においては、（プ）を「私の思い出」として語った後に「もうかれこれ三、四年になる」とあり、（プ）から（一）へ移行するにあたって三、四年の時間が経過している。（二）には、「夏が一周りしてやつてきた」とあり、（三）にも「次ぎの夏休みには」という記

述がある。（エ）のみ、時間の記述がないため特定することができないが、（一）から（三）は、一年ずつ経過している。また、「私」は一年のうちで夏、あるいは秋の出来事を語っている。つまりテキスト内を流れる時間は、語り手である「私」によって断片として切り取られた、ある年の夏または秋である。その記憶の断片を「私」は時系列通りに繋げ、一つの物語として語っている。

「私」は、記憶の断片をつなげて主に「お前」に語りかける。このとき、それぞれのエピソードを繋げ、「私」の記憶の中の「お前」を呼び起こす手掛かりとして機能しているのが麦藁帽子だと考えられる。テキスト内で「お前」はしばしば麦藁帽子と共に語られている。この麦藁帽子の語られる方には、ある特徴が存在する。それは感覚表現の多用である。

麦藁帽子に関する描写は、五箇所ある。以下、登場順に確認しよう。冒頭の番号は、登場順に付した。麦藁帽子が初めに語られるのは、「お前」が「私」の釣り針に蚯蚓をつけるために、身をかめた場面である。

①お前はよそゆきの、赤いさくらんぼの飾りの

ついた、麦藁帽子をかぶつてゐる。そのしなやかな帽子の縁が、私の頬をそつと撫でる。私はお前に氣どられぬやうに深い呼吸をする。しかしお前はなんの匂ひもしない。ただ麦藁帽子の、かすかに焦げる匂ひがするきりで。……私は物足りなくて、なんだかお前にだまかされてゐるやうな氣さへする。(一一)

ここでは、「赤い」という視覚表現、「撫でる」という触覚表現、「匂ひ」という嗅覚表現を用いて麦藁帽子を描写している。麦藁帽子が、同時に三つの感覚を通して語られるのは五つの場面のうちで①だけである。「私」は視覚、触覚、嗅覚によつて麦藁帽子を感受し、「お前」の被る麦藁帽子の實態を立体的に語ろうとしている。

次に麦藁帽子が描写されるのは休暇を終え、避暑地から帰る汽車においてである。

②お前が誰よりも一番色が黒いので、お前は得意さうだった。私は少しがっかりした。だが、お前がちよつと斜めに冠つてゐる、赤いさくらんぼの飾りのついたお前の麦藁帽子は、お前のそんな黒いあどけない顔に、大層よく似合つて

ゐた。(一二)

麦藁帽子に関する描写は「赤い」という視覚表現だけであるが、「お前」の「黒さ」と並べて描写すること、視覚情報がより印象強く語られている。①で語られていた触覚と嗅覚による表現はなく、見たままの麦藁帽子を語っている。

次は、それから一年が経過し、「私」が「お前」と再会する場面で麦藁帽子は描出される。

③昔のお前をあんなにもあどけなく見せてゐた、赤いさくらんぼのついた麦藁帽子もかぶらずに、若い女のやうに、髪を葡萄の房のやうな恰好に編んでゐた。(一二)

ここで「私」は、「葡萄の房」という表現を用いて「赤いさくらんぼ」と対照的に語ることににより、視覚的に訴えかけ、麦藁帽子の不在を強調している。これ以降、「私」による麦藁帽子の語り方に変化が生じる。秋になったある日、「お前」と思われる人物とすれ違った時、再び麦藁帽子は喚起される。

④私たちは空気のやうにすれちがつた。その一人はどうもお前らしかった。すれちがひざま、私はふとその少女の無造作に編んだ髪に目をやった。それが秋の日にかすかに匂った。私はそのかすかな日の匂ひに、いつかの麦藁帽子の匂ひを思ひ出した。私はひどく息をはずませた。

(二)

③の場面で、「お前」から麦藁帽子は失われたものの、「私」にとつて麦藁帽子は変わらず「お前」と「私」の記憶を結ぶ手がかりである。それゆえに視覚表現は消え、嗅覚表現である「匂ひ」を用いて語ることで、そこに麦藁帽子が存在しているかのような仕掛けを施しているのだ。嗅覚に依存した語りは最後の⑤の場面にも現れる。地震があった日、「お前」と再会した日の夜のことである。

⑤……すこしうとうと眠つてから、ふと目をさますと、誰だか知らない、寝みだれた女の髪の毛が、私の頬に触つてゐるのに気がついた。私はゆめうつつに、そのうつすらした香りをおいだ。その香りは、私の鼻先の髪の毛からといふよりも、私の記憶の中から、うつすら浮ん

でくるやうに見えた。それは匂ひのしないお前の匂ひだ。太陽のにほひだ。麦藁帽子のにほひだ。(エ)

ここでも麦藁帽子は嗅覚を通して語られている。また、④では「麦藁帽子の匂ひ」と語られていたのに対し、⑤では「麦藁帽子のにほひ」と表現が変化している。「にほひ」に付与された意味については後述するが、同じ対象であつても表現を変えていることから、「私」は嗅覚表現を意識的に使い分けていることが看取できる。

以上見てきたとおり、「お前」と共に語られる麦藁帽子は、「私」の記憶における「お前」の形象化の媒介となつてゐる。「私」の語りを追つてみると、触覚(①)、視覚(①②③)、嗅覚(①④⑤)といった感覚に依拠した表現を効果的に用いて麦藁帽子を語っている。「私」は感覚表現を多用することで臨場感を演出し、麦藁帽子を、あるいは麦藁帽子を身につけている「お前」をより立体的に描き出そうとしている。その中でも、嗅覚を通じた感覚表現の多様化は触覚、視覚に比べて著しく、目を引くものがある。そこで次節では、嗅覚による表現に注目する。

## 二、嗅覚の特権化

麦藁帽子が語られる五箇所のうち、三箇所は嗅覚を通じた表現と共に語られる。さらに嗅覚表現は、物語の最後の章まで用いられ、「私」の記憶に臨場感を与え続けており、感覚の中でも特権化されていると言える。

嗅覚による表現の中でも、「匂ひ」に注目した先行研究はすでにある。例えば中島昭は、堀の作品化の方法を明らかにする中で、「麦藁帽子が「匂い」を中心に描写され」ていることに注目し、「各章の冒頭文に時間のうつりゆきを示す文を据えて「お前」の変貌を描くとともに、「エピソード」の麦藁帽子の「匂い」に収斂する形で構成」されていると指摘する（8）。また西原千博も、「（麦藁帽子）と「お前」という語」は、「「匂い」という語によって結びつけられ、「「匂い」という項に於いて、（麦藁帽子）は「お前」の身代わりになったのである、この二つの単語が等価であることを示」している（9）。

これらの指摘に従うと、「お前」と麦藁帽子は「匂ひ」を媒介にして結びついていると言える。しか

しここで注目したいのは、先述したように、嗅覚による表現がテクストの中で多数用いられている点である。「私」の語りにおいて、嗅覚の特権化するのであれば「匂ひ」のみならず、他の嗅覚表現についても目を向ける必要があるだろう。テクスト内では嗅覚を用いた感覚表現として「匂ひ」の他に、「臭ひ」、「香り」、「にほひ」が挙げられる。では、これらの嗅覚表現に付与されている意味は何か。個々の嗅覚表現について順に検討していきたい。

麦藁帽子との関連の中で最も多く語られているのは「匂ひ」である。「匂ひ」は、①で「お前はなんの匂ひもしない。ただ麦藁帽子の、かすかに焦げる匂ひがするきりで」と語られ、次に④で「秋の日にかすかに匂った。私はそのかすかな日の匂ひに、いつかの麦藁帽子の匂ひを思ひ出した」と描写され、最後に⑤で「匂ひのしないお前の匂ひだ」と語られる。以上の叙述からは、先行論の指摘のように「お前」と麦藁帽子をつなぐ媒介としての「匂ひ」の機能を見出すことができる。

しかし、「匂ひ」を麦藁帽子と「お前」の媒介としての意味付けようとすると、回収できない問題が発生する。それは、（一）で、「焼けた砂が、

まるでパンの焦げるやうな匂ひがした」と語られる箇所である。麦藁帽子との関連以外で「匂ひ」が用いられるのはこの一文のみである。この一文で注目すべきは「焦げるやうな」という叙述である。「焦げる匂ひ」は麦藁帽子の描写にも用いられている。しかし、麦藁帽子の「焦げる匂ひ」という描写に対して「私」がどのように感じているのかは語られない。だが「パンの焦げるやうな匂ひ匂ひ」という表現があることから、「私」は「焦げる匂ひ」を好ましく感じていると考えられる。だとすれば、「匂ひ」は「私」が好ましく感じた際に語る表現ということになる。「焦げる匂ひ」を「私」が肯定的に受け止めているということを示す伏線として、「パンの焦げるやうな」「匂ひ」という比喩が用いられていると考えられよう。

一方、「匂ひ」とは対照的に、否定的に用いられる表現が「臭ひ」である。(二)で「私」は、「私」と同じ年の「お前の姉」のことを、「いつも髪の毛を洗ったあとのやうな、いやな臭ひをさせてゐた」と語る。嗅覚を通して好ましくないと感じる対象には「臭ひ」を用いていることがわかる。

また、「匂ひ」と同じように好ましさを示しているのが「香り」である。ただし「香り」には、「匂

ひ」とは異なる、ある特徴を見出し得る。⑤の場面では、「誰だか知らない」髪の毛に対して、「私」は「ゆめうつつに、そのうつすらした香りをかぐ。そして、「その香りは、私の鼻先の髪の毛からといふよりも、私の記憶の中から、うつすら浮んでくるやうに見えた」と語っている。「匂ひ」も「臭ひ」もその対象が明確であつた。ところが「香り」が感じ取られた髪の毛は、誰の髪の毛なのかわからない。実態を把握できないものの、好ましいと嗅覚で感じ取られた対象については、「香り」を用いて表現しているのであろう。

「香り」と同様に、⑤の場面で用いられているのが「にほひ」である。「私の記憶の中から、うつすら浮んでくるやうに見えた。それは匂ひのしなほひだ」と語られる。実態を掴むことができなかった「香り」は、「私」の記憶と結びつき、「匂ひ」と表現される。さらに「匂ひ」は、太陽や麦藁帽子と繋がることで「にほひ」となる。太陽や麦藁帽子は、テクスト内において「私」によつて語られてきた、夏の記憶を想起させるものである。これにより「にほひ」は、「匂ひ」のように、好ましか否かで回収することのできない、懐かしさを

前景化させた表現として用いられていると考えられる。

このように「私」は、嗅覚による感覚表現を複数用いており、さらにそれぞれの表現に異なる意味を付与して使い分けている。そして、「私」の感じたことを表現の使い分けによって巧みに語っているのだ。嗅覚を通して表現は、テクストの構造を成立させている一要素であると言えるだろう。「私」が断片として切り取った記憶を喚起させ、鮮明に描き出すことを可能にしているのが嗅覚表現なのである。ところが、こうしたテクストの言語運用は、逆に嗅覚表現が一切用いられない対象を喚起させる。それが「母」である。

### 三、浮上する「母」

「母」に触れた先行論としては、先に挙げた野口の論考がある。野口は「少女とならんで主人公の母もまた重要な役割を果たしている」としながらも、「少女への恋愛感情」が「母から遠去かろうとするメカニズムを作動させる」とし、「作者がこの作品で第一義的に表現対象にしたかったのは母ではなく、あくまで麦藁帽子の少女だった」

と指摘する(10)。

しかし、野口の指摘する「少女への恋愛感情」は、物語の途中から徐々に薄れていく。それが最もよく表れている(三)において、「私」は、久しぶりに見た「お前」について「嘗てはあんなにもあどけなく思つてゐた私の昔の恋人の、いまは何んと私の目には、一箇の、よそよそしい、偏屈な娘としてのみ映ることよ！」と語っている。ここにはすでに、麦藁帽子の表象も、「匂ひ」といった嗅覚表現も存在しない。この場面には、もはや「あどけなく」い「お前」はいない。こうした「お前」に対する感情の変化に対して、逆の曲線を描くのが「母」に対する表現である。

(一)での、「私の母から話しかけられるのさえ、ひどく羞かしがつてゐた」り、「ろくすつぽ口もき」かないという「私」の語りは、幼い頃から「私」が「母」に対して過剰に反応していたことを示す。これは、思春期の少年が示す「母」に対する恥じらいや反発、いわゆる親離れの状態であろう。

そして(二)では、「私」と「母」との関係が「いくらかずつ悲劇的な性質を帯びだした」と言う。一方的に「母」から離れようとしている「私」を語っていた(一)に対して、(二)では「母」の側



の対応が語られる。例えば、「彼女は私の中に昔ながらの子供らしさを見つけるまでは、ちつとも落ち着かなかつた」という語りからは、子離れできない「母」の様子が窺える。つまり、「私」は「母」から離れようとするのに対し、「母」は「私」に対して子供の頃と変わらない接し方をしているのである。よって、「悲劇的な性質」とは、「母」の愛情に「私」が対応できていないことを示す。こうした「私」と「母」の不均衡な親子関係は（三）に至って異なる様相を帯び始める。

（三）では、高原に行ったことをきっかけに、早く有名な詩人になりたいという野心に燃えていた「私」に対する、「母」の様子が描写される。「母」は、「はじめて彼女の本当の息子が帰って来たかのやうに幸福そうだった」り、「ただ私の中に蘇った子供らしさの故に、夢中になつて私を愛した」と語られる。しかし、（一）や（二）とは異なり、ここには「母」に対する否定的な感情は表れていない。「母」の愛情が全面的に語られているにもかかわらず、そのような「母」を拒否する「私」の内面は語られていないのだ。この変化は、子離れできない「母」を「私」が受け入れるようになったことを表している。先に述べたように、（三）では

「お前」への愛情が薄れたことも語られており、「母」の前景化が起こるのは（三）からだと言える。

そして（エ）では、「母」が死んだかもしれないという話を聞いた直後、「私」は涙を流す。しかしその涙について、「母の死を悲しんでゐるのではなく、「母」の死の悲しみのために「すぐかうして泣けるには」、悲しみが「あまりに大き過ぎる」と「私」は語っている。「母」の死は「私」にとつて衝撃が大きいので、すぐに受け入れることができないのだ。「私」の中における「母」の存在の大きさが、この場面では語られているのである。

このように、（一）・（二）と（三）・（エ）では母の語られ方に変化が起きている。それぞれの章で語られている「母」を追ってみると、「私」の「母」に対する思いの変化が物語として編まれていると言えるのではないだろうか。また、「お前」への気持ちが薄れる（三）から「母」に対する態度にも変化が起こっている。その予兆の一つとして「あなた」という呼びかけの出現を挙げることができ。「私」が「あなた」と呼びかけるのは次の箇所である（11）。

若し私がそんな子供らしさの似合はない年頃になつても、まだ、そんな子供らしさを持ち合はせてゐるために不幸な人間になるとしたら、お母さん、それは全くあなたのせいです。(二)

「私」が寄宿舎から家へ帰るたびに、「母」が「私」の中に昔ながらの子どもらしさを見つけるまで落ち着かなかつたということを語つた直後の描写である。「あなた」の出現により、「私」が呼びかけるのはテキストの中で「お前」だけではないことが記される。そして「あなた」と呼びかけたこの場面以降から、物語も変容していくと言えるだろう。

さて、二節で見てきたように、「私」は嗅覚表現を用いることで語る対象を鮮明に描き出そうとしていた。それは逆に言えば、嗅覚による感覚表現の不在が、「私」の語りにおいて対象の不鮮明さを演出することになる。ではなぜ「私」は、「母」を鮮明に語ることを避けているのか。その鍵となるのが、(エ)で語られる「私」が涙を流す場面である。

先にも触れたように、「私」がそのためにすぐかうして泣けるには、あまりに大き過ぎる！」という

告白からは、「私」にとつて「母」の死は重大であり、まだ受け入れられていないことがわかる。しかし他の対象と同じように、「母」についても嗅覚を通して語り進めてしまうと、(エ)において「母」を語る際、その場にいらない「母」を鮮明に描写しなければならなくなる。その結果、「母」の死と直面せざるをえなくなる。つまり、(エ)において「母」の不在を受け入れなければならない状況を回避するため、テキストを通して、「母」に対する嗅覚表現を用いた描写を意図的に避けていたと解釈することが出来る。そして、他の対象は嗅覚表現と共に語ることで「母」の描写との差異化が図られていたのである。

また、この場面において「私」は、「昨夜の自分」がもう愛してゐないと思つてゐたお前、「お前の方でももう私を愛してはゐないと思つてゐたお前」、「お前との思ひがけない不思議な愛撫」と、何度も「お前」と呼びかける。ここから、「お前」と呼びかければ呼びかけるほど、「母」を意図的に隠蔽しようとする「私」の意識が浮き彫りになる。つまり、「私」が語りたくて語り得なかつたのは「母」なのである。そこには、「母」の死を受け入れることができない「私」の姿が投影されている

と言えよう。

## おわりに

これまで見てきたように、「私」の語る麦藁帽子に焦点を当てると、「麦藁帽子」は「私」が嗅覚表現を効果的に用いて語るテキストであると言える。そして、意識的に嗅覚表現を用いて語っているにもかかわらず、嗅覚を用いて語られない「母」の存在が浮上する。これまで「麦藁帽子」は、麦藁帽子と直接的に結びつく「お前」との思い出が語られたテキストとして位置付けられてきた。しかし、「私」の語りの特徴を考慮すると、「麦藁帽子」で「私」が語りたかったのは、「お前」ではなく「母」ではなかったか。「母」の死を受け入れられない「私」は、「お前」を鮮明に語ることで、「母」を隠蔽しようとした。しかし、所々で「母」が前景化してしまい、「私」の本意の痕跡が残されてしまっている。それが「母」に対する語りの変容と、「あなた」という呼びかけの出現である。そもそも、「お前」を語りたいのであれば、「麦藁帽子」で「母」について語る必要性がなくなってしまうだろう。

「麦藁帽子」は、「お前」との思い出を描き出し

ているように見せつつ、実は「母」を前景化しているテキストなのである。

## 註

- (1) 中島昭「内海妙」(竹内清己編『堀辰雄事典』所収、勉誠出版、二〇〇一・十一)
- (2) 大森郁之助「麦藁帽子」(『堀辰雄事典』所収)
- (3) 野口存彌「堀辰雄―「麦藁帽子」の背景」(『群系』、二〇〇三・十)
- (4) 堀辰雄「小説のことなど」(『新潮』、一九三四・七)。引用は『堀辰雄全集』第三卷(筑摩書房、一九七七・十一)に拠った。
- (5) 「堀辰雄の人と作品」(池内輝雄編『鑑賞日本現代文学第十八卷 堀辰雄』所収、角川書店、一九八一・十一)
- (6) 「「麦藁帽子」の位置と意味」(『四季派学会論集』、一九九〇・三)
- (7) 「堀辰雄の「修辞学」」(池内輝雄編『国文学解釈と鑑賞』別冊 堀辰雄とモダニズム』所収、至文堂、二〇〇四・二)
- (8) 『「麦藁帽子」―その素材と方法―』(中島昭

『堀辰雄覚書―『風立ちぬ』まで―』所収、  
近代文藝社、一九八四・一

(9) 「『麦藁帽子』試解」(『静岡英和女学院短期  
大学紀要』、一九八四・三)

(10) (3)と同。

(11) 本稿では「お前」との対比の関係上、「あなた」という人称代名詞にのみ言及したが、「お母さん」という表記についてもこの引用部のみ用いられているため、同様のことが言えるだろう。

※本文の引用は『堀辰雄全集』第一卷(筑摩書房、  
一九七七・五)に拠った。また、原文のルビ等  
は省略し、旧字は適宜新字に改めた。